

ICOM KYOTO 2019

ポストカンファレンス in 北海道を終えて

研究ノート
【博物館】



2019年に日本で初めて世界最大の博物館会議が京都で開催されました。この国際大会はICOM (International Council of Museums: 国際博物館会議) とよばれており、1946年に創設された国際的な組織で、世界のミュージアムの振興を目指しているユネスコの協力機関です。ICOMには、世界約140の国と地域から様々な分野のミュージアムの専門家が参加しています。3年に一度、全てのメンバーが一堂に会する世界大会が開催されます。

この機会に、北海道に世界の博物館関係者を呼び込もうと企画されたのが「ICOM京都大会2019ポストカンファレンス in 北海道」です。主催はICOM京都大会2019組織委員会と、伊達市・洞爺湖町、地元商工会や観光関係による伊達洞爺湖ミュージアム地域振興プラットフォーム（実行委員会名誉委員長：石森修三北海道博物館館長）です。

■ポストカンファレンスツアーの目的

北海道は近年、その豊かな自然と食でアジアの観光客を中心に高い人気を誇っています。伊達市は「北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録」を目指す北黄金貝塚、アイヌ民族、そして武士による開拓でもたらされた歴史文化背景をもつまちです。また、洞爺湖町も入江・高砂貝塚を有し、この地域には縄文から続くその豊かな風土に根差した文化を展示する地方博物館が点在しています。2019年4月に日本一新しい地方博物館「だて歴史文化ミュージアム」が開館したこともあり、ICOM KYOTO 2019のテーマである“Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition”（文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ—）を地方に転換したツアーを開催しました。そして北海道の研究者とICOM研究者の交流促進を図ることを目的としています。

■どんなことをしたのか？

一つはテクニカルビジットという施設見学会とシンポジウムを実施しました。今回は6か所の地方博物館（二風谷アイヌ文化博物館・北黄金貝塚・だて歴史文化ミュージアム・入江高砂貝塚・洞爺湖ビジターセンター及・有珠山噴火関連遺構）の施設と2020年開館の国立アイヌ民族博物館を巡りました。そこでは学芸員や解説ガイドが業務や施設につ

だて歴史文化ミュージアム 伊達 元成

いて説明しました。縄文文化からアイヌ文化、武家の集団移住にジオパークという魅力がたくさん詰まった地域であることを、海外の研究者の皆さんに紹介することができました。

シンポジウムはだて歴史の杜カルチャーセンターで開催しました。日本ではこれから本格的な少子高齢化時代が到来し、中でも北海道は全国よりも10年先んじて進展すると言われ、過疎化や都市機能の低下により、人々のつながりや地域文化、伝統の喪失が危惧されています。地域がもつ歴史文化は、地域のアイデンティティとして地域の発展には欠かせない要素であり、それらを未来へつなげる役割を果たす地方博物館の重要性を考えるシンポジウムを開催しました。

シンポジウムはICOM会長スアイ・アクソイ氏の挨拶からスタートし、イリナ・ジュモツ氏ICR（地方博物館国際委員会）委員長、ミリアム・モレル＝ドゥルダール氏 ICMAH（考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会）委員長、そして北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授佐々木利和氏による講演が行われました。

最後に博物館の運営、集客そして研究・保存と活用の在り方について、地方博物館の課題を討論しました。実行委員長の石森修三氏をモデレーターに、パネリストは先の講演者に加えて伊丹市昆虫館副館長の坂本昇氏と小樽市総合博物館館長石川直章氏らによるパネルディスカッションを実施しました。ここでは北海道に初めて設立される国立博物館と地方博物館の地域連携による相乗効果の可能性も討論され、北海道の地方博物館は、海外からも充分評価されるコンテンツがあり、他館と連携することでよりその魅力が増すはずだと議論が盛り上がりました。

